

文筆家

# デーヴィッド・マークス

アメリカ出身で東京を拠点に活躍する文筆家、デーヴィッド・マークス氏は自分の人生が決まった日のことをはっきり覚えていてという。大学生の時に日本の出版社でのインターンシップに参加。その雑誌に紹介されていたブランドの記事が気になり、裏原宿へ行った。すると店の場所は人目につく大通りではなく、看板さえないにもかかわらず、大勢の若者が長時間並んでおり、自身も苦労してTシャツを買う。カルチャーショックを受けた。そして若者文化のエネルギーに心を鷲掴みにされた。あの日の体験が日本との縁を結び、今の仕事へと続いている。時間ができるとソウルや上海、沖縄・竹富島などでも過ごす。一番住みたい街は東京。好んで出かけるのが、定食屋、喫茶店、洋食店といった日本独特の飲食店だ。「それを文化財として認めて守らないと消えてしまつ」と危惧する。

今は世界の人々がアナログを重視する文化に惹きつけられ、メイド・イン・ジャパンがおしゃれに映る。が、日本人自身がその価値に気付いているのかどうか。グローバルな視点を持つ人だからこそ、日本がなすべきこと、守るべきことが見える。その言葉は温かく、そして深い。

撮影◎戸川寛

## 東京在住20年に及ぶ文筆家が語る 世界が憧れる日本独自の 文化の魅力と課題

日本の服飾文化について造詣が深い文筆家、デーヴィッド・マークス氏。消費者行動を分析したユニークな記事は、業界で注目されている。アメリカンスタイルのファッションに日本が与えた影響について研究した初の著作「AMETORA」はアメリカで刊行され、日本やアジア各国でも話題になった。東京在住20年になるマークス氏の自宅で、ファッションの過去と現在、世界の人々を引きつける日本文化の魅力、グローバルイズムが進む現代にあつて日本人がどう行動するべきか、そのヒントを聞いた。

### 裏原宿で出会った日本の ファッション文化に衝撃

伊藤 デーヴィッド・マークスさんはファッションや音楽、アートなど、ポップカルチャーのフィールドで旺盛な執筆活動を続けていらつしゃいます。まずはデーヴィッドさんのバックグラウンドと、日本に來られたきっかけをお話しいただけますか。

マークス 私の父親が大学教授だった関係で、1978年にアメリカ南部、オクラホマ州のオクラホマ大学があるノーマンという町で生まれ

ました。9歳から高校卒業まではフロリダ州ペンサコーラ市にいたのですが、そこが90年代に岐阜県萩原町（現・下呂市）と姉妹都市だったことから17歳の夏休みに初めて日本へ来て、3週間過ごしました。それまでフランス語とドイツ語を勉強していたのですが、「なんか日本語、いいな」と思うようになってハーバード大学東洋学部に入り、日本語や日本の社会、文化を勉強しました。

ハーバード大学と講談社の間にインターンプログラムがありまして、1年生と2年生の間の夏休みに3カ月間、いろいろな雑誌の編集部で働きました。最後のほうは『ホットドッグ・プ

レス』という『ポパイ』みたいなライフスタイルファッション誌の編集部にいました。それまでファッションに興味はなかったのですが、雑誌で紹介されていた「ABATHING APE」というブランドの記事を読んで、そのTシャツが欲しくなり、裏原宿のお店に行つたのです。すると大勢の人が行列していて。お店に入るまでに1時間、店に入ってから2時間待って、たぶんアメリカの倍はする値段で買ったのです。しかも驚いたことに、1年前のそのブランドのTシャツが古着屋で2、3倍の値段で売られていて。そんな現象はアメリカには全くなかったので、とても不思議に感じました。